

女優・吉永小百合の通算122本目の主演映画『いのちの停車場』（成島監督）が公開になる。吉永は今作が初の医師役で、長く勤めた東京の救命救急センターを退職し、故郷の金沢に戻り在宅医療専門医となる白石咲和子を演じている。松坂桃李、広瀬すずなど実力と人気を兼ね備えた若手俳優たちが共演。終末期患者やその家族と向き合う医師の姿が描かれる。

この話題作の原作者は徳島市出身の医師で作家の南杏子さん。

「映画化の話をもたらったとき、本当に夢だと思いました」と笑顔を浮かべる南さん。「担当の編集者から電話があり、”南さん、落ち着いて聞いてください。”と言われて。一瞬、私、何かやらしたのかなと思って聞いたら、”映画になります。”と言われて絶句でした。おまけに吉永小百合さんが主演だって。驚くどころじゃなかった（笑）。もう本当にありがたくて」

映画化を誰よりも喜んだのが羽ノ浦町（現、阿南市）生まれの父親だった。これまでも、2016年に『サイレント・ブレス』で作家デビューしたとき、父親が近くの書店で100冊単位で本を買い込み、近所に配って娘のデビューを祝ったことがあった。ただ、その後、父親の関心は孫に移り、

娘の著作が出版されても大して関心は示さなかった。ところが今回、主演が吉永と知ると「本を爆買いしてたのがおかしかった（笑）」。

小説の映画化は、時に小説の世界観と乖離することがある。また人物像も違ってしまうことが多々ある。映画化の話がまとまった時、そんな不安はなかったのだろうか。

「小説と映画は別物と割り切っておりまして、ただ楽しみでした。撮影に入る前に脚本を読ませていただき、映画の予告編を見せてもらいましたが、小説の世界が奥行き深く表現されていて感激しました。映画の中の咲和子先生は、私が描いた以上の咲和子先生でしたし、”まほろば診療所”は小説の中の診療所ではなく、本当にあるんだとも思えました」

子どもの頃から本が好きだった。まだサンタクロースを信じていた少女時代、「サンタさんが”りぼん”という少女漫画誌をプレゼントしてくれ、それ以来漫画に夢中になりました」

図書館に通い、片っ端から「読み漁って

ました。漫画だけじゃなく、理系の父親が読んでいる科学系の図鑑も楽しくて好きでした。親から小遣いをもらうという家庭ではなく、自分で本を買えなかったので、父が読み終えた経済小説なども読んでました」

徳島で暮らしたのは生まれてから3歳まで。その後は父親の転勤で、西宮、名古屋などへ引越し、小学校は3校、高校は2校に通った。

南さんが進学したのは、文学部でも医学部でもなく、日本女子大の家政学部被服学科。

「父は繊維メーカーの勤務で、母が家で楽しそうにミシンを踏んでいる姿も見て育ちました。被服科は馴染みのある分野だったんです」

東京には当時、祖父母が暮らしており、そこで下宿した。

「大学時代も本が好きでよく読みました。瀬戸内寂聴、三浦綾子、有吉和子など。卒業後を考えるようになった頃には、女性誌を出している出版社に就職したいと思うようになっていました」

ただ大学時代、祖父の介護で、バラ色のキャンパスライフとはいかなかった。

「でもその体験が、後に小説の中に生きて



くるんですが、当時は大変でした」

卒業後、出版社に勤務。育児雑誌の編集部に配属され、子どもの病気や離乳食の取材を担当した。25歳で結婚。長女を妊娠中に夫が英国に研修留学することが決まり、同行する。

「単身赴任は考えませんでした。知らない土地で暮らすことに、何だかワクワクして

ましたから」

その間、退職はせず、1年間の育児休暇を取ることにした。

「イギリスで印象的だったのは、総合診療医によるホームドクター制度。近所のクリニックの先生を一人決めて登録し、もっぱらその先生に診てもらおう。私のホームドクターはインドから来た女性でした。ドク

ター自身が多民族国家の人なので、アジア人の海外でのいろいろな不安にも対応してくれて、いい制度だなあと思いました」

英国で通った公立のコミュニティー・カレッジも、南さんの意識を変えた。あらゆる講座があり、若い人たちだけでなく高齢者も通っていた。「30過ぎてても、高齢者になっても、幾つになっても、勉強していいんだ、



年を取つてからでも学校に行つてもいいじゃないかと」

帰国後も乳幼児の病気を取材し、記事を執筆するなかで、もつと病気について知りたいという思いが募り、医者を目指す。

長女が2歳のときに東海大医学部2年に編入。卒業後は都内の大学病院老年内科に勤務した。時を経た後、再び夫の英国転勤が決まり、渡英。さらにスイスへと転勤。南さんはスイスで在留邦人の医療福祉互助会の顧問医などを務めた。

スイスから帰国後、娘の成長で子育てを終えた南さんは、再び文章を書きたいとカルチャースクールの小説教室を受講。

「小説を書いて提出すると講評してもらえます。いろんなテーマで作品を書いて提出してみた中で、講師に評価してもらえたのは医師として現場を知っている医療モノでした」といい、終末期の在宅医療をテーマにしたデビュー作『サイレント・ブレース』、今回の『いのちの停車場』などの話題作に注目が集まっている。

今、徳島には母方の伯母、日本画家の

長尾弘子さんが暮らす。

「学校の長期休暇中は、長い日数を徳島で過ごしていました。夏は伯母が阿波踊りの栈敷券を用意してくれて、阿波踊りに連れていってくれました。後に、栈敷券を取るのがどれだけ大変なことか知って驚きました」

作家デビュー後は徳島に行く機会がなかなか取れないという。それでも、行けば人形浄瑠璃を見たり渦潮を見に行ったりする。

「徳島は美味しいものが多いですね。うどんも餅もひと味違う。和菓子や竹に巻い

た竹輪も大好きです」

徳島の糖尿病死亡率が高いのは、美味しいものが多いことも関係ありそうだ。

「でも食べ過ぎには注意。おやつが食べたくなったら、竹輪にすだちをかけて食べるとかにして、糖質を抑えるようにしています」

柔和さの中にキリッとした気品を感じさせる南さん。日々の暮らしを丁寧に重ねることが容易に推測される美しさが見える。次に紡がれる言葉たちも、やはり医療という名のもとに集結するのだろうか。

(取材・文／北島由記子 写真／永井守)

